

す脚柱部から屈曲してハの字にひらく脚裾部に4ヶ所の円孔を穿つ。形態的特徴から吉備南部地域からの搬入土器と考えられるが、精製されていない灰褐色の胎土は同地で高坏ではなく壺甕に用いられるものと酷似しており、粘土の選択が異なる<sup>註5</sup>。9は小型器台で、受部口縁部は短くつまみ出すように立ち上げ、緩やかにハの字に開く脚部に3方向の円孔を穿つ。類例として真庭市谷尻遺跡No.176土壙出土例がある。8・9は吉備地域の諸例から、終末期後半に比定される。

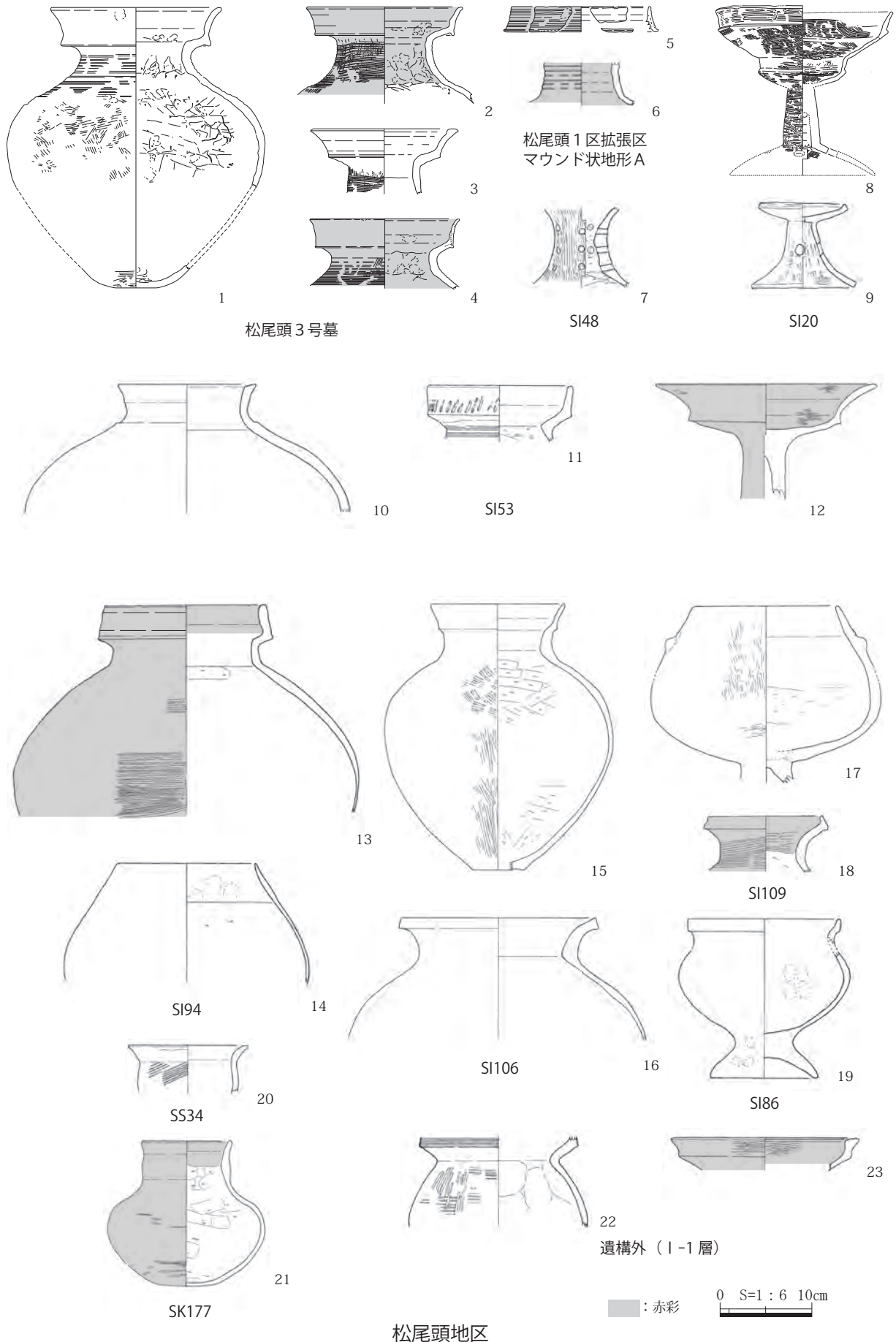
**松尾頭 SI53** 第99図10はやや外傾して短く立ち上がる口縁～頸部をもつ壺である。頸部の根元は成形時に強くナデられてわずかに段を有す。在地の壺にも直口壺はあるが、器形及び胎土が異なり、外来系土器と判断した。11は口縁部に櫛状工具で押し引き文、頸部に同工具で多条平行沈線文を施す。通有の在地土器は、頸部に多条平行沈線文を施さない。12は坏部上半が外反して大きく開く高坏で、内外面とも赤彩されている。吉備北部地域は弥生時代後期後葉に大型の壺、大半の小型土器など丹塗土器の比率が高くなることが指摘されており（高橋1980）、共伴する在地土器も当該時期に比定される。坏部の形態的特徴も含めて考えれば、吉備北部地域からの搬入土器の可能性もある。

**松尾頭 SI94** 第99図13はやや内傾する複合口縁をもつ壺で、頸部は強く屈曲し、断面がコ字状を呈す。口縁内面は赤彩され、表面の風化は顕著だが外面にも口縁～頸部付近まで赤彩痕跡が明確に確認できる。胴部全体に点々とだが赤彩痕跡が認められるので、本来は外面全体に塗彩されていたと推測する。同様の形態的特徴をもつ壺は、福山市大宮遺跡（神辺町教育委員会1988）など備後北部地域で後期中葉から見られる。14はワイングラス形を呈す大型の無頸壺で、胎土は淡黄橙色を呈し角閃石を少量含む。器形は近畿北部～北陸地域の無頸壺に似るが、口縁部の立ち上がりや調整に差異があり、同地域に由来するものとしても模倣土器の可能性が高いと考える。

**松尾頭 SI106** 第99図15は壺で、複合口縁の整形と体部調整に特徴がある。複合口縁は外面の稜を上下に強くナデることで作出し、直線的に引き延ばすように上方へ拡張している。胴部は基本的にミガキで仕上げるが、肩部から胴部上半にタタキ目を残し、さらに底部外面にはハケメが残る。あまり砂粒を含まない浅黄橙色の胎土をもつ。吉備北部地域でも特に吉井川上流に位置する美作中央部以東は、概ね弥生時代終末期以降、近接地域・遺跡間で差もみられながらタタキ目を残す壺や甕を主体として播磨以東の影響を受けた土器が顕著に認められることで知られる（藤田1978、中山1981、團2001）。土器が搬入された候補地として、上記地域を挙げておきたい。16も同系色の胎土をもつ壺で、径2mm程度の軽石と見られる碎屑物を多量に含むことが特徴である。口縁は頸部から外反して開きながら立ち上がり、頸部内面は屈曲して稜をもつ。風化が顕著で調整や施文の有無は不明である。系譜が辿れず胎土も大きく異なるため、外来系土器と判断した。

**松尾頭 SI109** 第99図17は近畿北部～北陸地域の脚付無頸壺に酷似するが、口縁部は外反せず擬凹線文もない。縦方向に付けられた把手は欠損している。脚部は欠損部の形状からみてハの字に開き始めており、やや短脚となる可能性も否定できない。以上のように相違点も多いが、在地土器とは明確に異なる白色の砂粒を多量に含む橙色の胎土であり、搬入土器と考える。18は頸部にハケ状工具による多条平行沈線文を施す壺で、外面を赤彩している。同様の特徴を有す土器はヒロダン・小坂向遺跡遺跡など吉備北部地域に多く、胎土の違和感はないが搬入土器の可能性もある。

**松尾頭 SI86** 第99図19は短く直立する無文の複合口縁をもつ台付壺である。短くハの字に開く脚台をもつ。本資料は台付装飾壺から模倣、変容したものである可能性もあるが、当地の一般的な台付装飾壺は脚台端部が複合口縁状を呈す点で異なる。同様の器形をもつ台付壺は近畿北部地域に多いが、



第99図 妻木晩田遺跡出土外来系土器(1)

本資料は複合口縁があまり拡張しない。器形的によく似た資料は真庭市旦山遺跡にもみられ（岡山県教育委員会 1999）、吉備北部地域との繋がりも考慮する必要がある。

**松尾頭 SS34** 第99図20は胴部外面にタタキ目を残す小型の甕で、頸部は屈曲せず、口縁は頸部からなだらかに開いて立ち上がる。タタキ目が残る以外は基本的にナデ調整で仕上げられており、ハケ・ケズリ痕跡は認められない。畿内系の甕ではあるが調整など変容しており、当地で製作された模倣品か、畿内系タタキ甕が一定量組成に入り込むことで知られる吉備北部地域からの搬入土器であろう。

**松尾頭 SK177** 第99図21は直口壺で、比較的精製された胎土をもち、外面及び口縁部内面は赤彩される。当地では一般的な器種ではなく外来系土器と判断したが、故地は特定できない。

**松尾頭地区遺構外（I -1 層）** 第99図22は、肩部にタタキ目が残る甕である。タタキによる成形後にナデあるいはハケではなく、ミガキ調整を雑に入れる。くの字に屈曲する厚みの変化がない頸部も特徴的で、吉備北部地域からの搬入土器であろうか。23は高杯で、杯部上半は稜をもち屈曲して立ち上がり、口縁端部をT字に肥厚させて3条の凹線文を施している。内外面赤彩され、にぶい褐色の胎土には角閃石が目立つ。吉備南部地域からの搬入土器で後期前葉に比定される。

**洞ノ原 1・2・4号墓** 第100図1は杯部上半が屈曲して立ち上がる高杯で、口縁端部を肥厚させる。胎土は在地土器と差異がない。模倣土器もしくは吉備北部地域からの搬入土器か。2は1号墓で出土した脚付鉢で、算盤玉形の胴部から外傾して立ち上がる頸部～口縁部に4条の凹線文を施す。形態的には庄原市佐田谷1～3号墓、新見市西江遺跡など備後北部から備中北部にかけて集中して分布する類型（真木 2017）だが、頸部から口縁部の立ち上がり形状、口縁端部の拡幅・無施文など変容が認められる。胎土も在地土器と差はみられず、模倣土器と考えられる。3・4は2号墓で出土した高杯であるが、上部（端部）を欠失しており脚付鉢の可能性もある。これらについては脚台の形態、多条平行沈線文で区画された文様帯と内側に配された縦方向の多条沈線文といった文様構成から、備後地域の関係が考慮されつつも、在地産製品であることが指摘されている（濱田 2002）。5・6も同一器種の脚部と考えられるが、脚裾部の内側を入念にケズリ器壁が薄くなるという備中西北部の整形上の特徴が認められる<sup>註6</sup>。7も含めて文様構成は備後地域に限らず吉備北部地域にも見られるので、在地産としても複合的な要素が混在している可能性は考慮しなければならない<sup>註7</sup>。8は4号墓で出土した高杯で、脚部には2号墓出土土器と同様の文様をもつ。2号墓出土土器も含め、施文工具は薄刃の金属器である。杯部の立ち上がりで稜をもち、口縁端部をやや肥厚させるなど、吉備地域の後期前葉段階の高杯の特徴を具備する。1～8は搬入、模倣を問わずすべて後期前葉に比定できる。

**洞ノ原西側丘陵住居 1** 第100図9・10は器台脚部で、外面に連続する鋸歯文を施す。吉備南部地域の装飾普通器台（近藤編 1992）の特徴を具備しており、製作者は当該地域の間人である可能性が高いが、胎土は異なるため模倣土器（の搬入品）と考えられる。形態的な特徴から後期後葉段階（大橋雅也氏編年第5段階（後・Ⅲ期）、大橋 1992）に比定される。

**洞ノ原 DH8号住居（SI08）** 第100図11は短頸の壺で、報告書（淀江町教育委員会 2000）で周防～安芸西部地域の特徴を有す土器と評価されているが、該当する器種等は定かでない。胎土は在地土器と比べると異質な印象は受ける。模倣土器の可能性はあるだろう。

**洞ノ原 SK12** 第100図12は脚付鉢である。算盤玉状の胴部～口縁部には文様がないが、脚部外面に洞ノ原2号墓出土脚付鉢と同様の多条平行沈線文が数段施文され、円孔が1段確認できる。これも洞ノ原2号墓出土資料と同様に吉備北部地域との繋がりの中で製作された模倣土器と考える。



第100図 妻木晩田遺跡出土外来系土器(2)

洞ノ原 SS05 第100図13はワイングラス形を呈す胴部外面に平行沈線文と連続する爪形の刺突文を施す。胎土的に在地土器と相違はない。吉備地域の台付直口壺の模倣土器と考えられ、朝金小チヤ1号墳丘墓出土例<sup>註8</sup>に法量的に近似する。

洞ノ原地区環壕 第100図14は赤色塗彩された鉢と思われる土器で、口縁部が断面楕円形に肥厚する特徴を有す。近年、朝鮮半島の粘土帯土器もしくは粘土帯土器の模倣土器の可能性をもつ「粘土帯系土器」として吉備北部地域で同種の土器が集成されている（石田2019）。本資料がその粘土帯系土器に位置づけられるかどうかは検討の余地が大きいだが、在地土器の系譜から辿れず赤彩という特徴も勘案すれば吉備北部地域との関係も考慮される。15・16は坏部上半で大きく外反する高杯で、器形及び共伴土器の時期からすれば後期後葉段階の吉備系高杯の可能性が高い<sup>註9</sup>。

洞ノ原地区西側丘陵遺構外（Ⅱ層） 第100図17は坏部有段となる高杯で、肥厚させた口縁端部には3条の凹線文を施す。赤彩され、にぶい黄橙色の胎土には角閃石が目立つ。吉備南部地域からの搬入土器で、後期前葉に比定される。

妻木新山 SK132・170・172・368、SS10 第100図18・19・21・22は坏部有段となる高杯で、肥厚させた口縁端部に2～3条の凹線文を施す。形態的特徴からすれば後期前葉の吉備地域の高杯と見られるが、出自は異なる可能性が高い。褐色の胎土に角閃石を多く含む19は吉備南部地域からの搬入土器である。21は坏屈曲部の稜をつまみ出すように突出させており、白色の細砂粒を多く含む特徴的な胎土で、内外面を赤彩する。吉備北部地域からの搬入土器の可能性が高い。18・22の胎土は在地土器と同じに見える。20は備後地域の鉢で、後期前葉に比定される（尾崎2017）。

仙谷3号墓 第100図23は直口（細頸）壺胴部で、胴部中央の突帯下に縦位の棒状浮文を貼り付けている。類例としては上東遺跡亀川調査区中層出土資料（岡山県教育委員会1976）など、後期中葉段階から見られる。胎土は吉備南部地域のものとは異なるため、供献土器として別地で製作し搬入されたか、工人が当地で製作したかのどちらかと考える。

仙谷4号墓 第100図24は単純口縁の長頸壺で、報告書（大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000）において周防地方など西部瀬戸内地域からの搬入土器と評価されている。胎土は在地土器と差がなく、形態的には周防東部の終末期Ⅰ（田畑2012）の資料に近いとはいえ変容しているように見えるため、模倣土器と考える。

妻木山 SI33 第100図25は上下に拡張された口縁端部が内傾する壺で、頸部に貝殻腹縁を2～3周させて多条平行沈線文を施す。風化が顕著で沈線の条数等は不明確だが、口縁端部がわずかに外反する形状を呈しており、頸部と同じ原体で平行沈線を施文している可能性がある。胎土は在地土器と同じで、吉備北部地域の影響を受けた模倣土器と考えられる。

妻木山 SI76 第100図26は外反する坏をもつ高杯である。白色砂粒を多量に含む胎土で、在地土器と比較すると違和感がある。脚端部を欠くが、欠損箇所から屈曲してハの字に開く形状であることがうかがえる。形態的特徴も踏まえると、吉備北部地域からの搬入土器の可能性はある。脚部は短脚化傾向がみられ、坏部と別に作り接合している。後期後葉段階のものか。

妻木山 SI117 第100図27は大型の鉢である。福山市大宮遺跡井戸出土資料など備後地域に類例がみられ、後期中葉段階に比定される（尾崎2017）。胎土は淡黄褐色を呈し、混和する砂粒に差異があるが第100図16に近似する。

妻木山 SI122 第100図28も鉢で、直立する口縁部外面は強いヨコナデによって整形される。胎土

は在地土器と差がないが、内外面赤彩される。形態的な特徴からすれば備後地域の後期中葉段階の鉢と見られるが、吉備北部地域で經由、製作された模倣土器（の搬入）の可能性もある。

**妻木山 SI173** 第100図29は第99図13のようなワイングラス形に近いが、口縁部で緩やかに括れる点が異なる。在地土器の系譜にみられない器種だが、故地は不明で、模倣土器と考える。白色の砂粒を多く含む以外は在地土器の胎土と大差ない。

**妻木山 6区 竪穴状遺構** 第100図30は吉備系装飾普通器台の口縁部片である。口縁端部に連続する鋸歯文を施す。口縁端部と受部内面に赤彩痕跡が認められる。後期中葉段階のものであろう。胎土が吉備南部地域とは異なるため、周縁部（吉備北部地域か）からの搬入土器の可能性はある。

**妻木山 SK86** 第100図31は胴部上半にタタキ目を残すくの字口縁甕で、胴部下半はハケ後ナデで仕上げる。一見、庄内甕に似るが、胎土が異なる。胎土的には、吉備北部地域、なかでも東側に位置する美作地域の諸例に近い<sup>註10</sup>。同地域は、播磨等を経由して畿内系土器が一定量流入し、模倣するかたちで土器様式の一画を占めることで知られ（高橋1980c、團2001）、故地の有力な候補として挙げられる。また、小型器台32は脚部に特徴があり、真庭市谷尻遺跡などに有段で円孔を穿つ脚部が出土している。胎土も31と酷似し、吉備北部地域の中でも美作地域からの搬入土器の可能性はある。

**妻木山 SI97** 第100図33は手焙形土器で、覆部と底部の間に突帯を有すが、一体化した形状を呈しており、ハケ目調整を基調として整形している。手焙形土器のA2類・Ⅲ期に位置づけられる足守川矢部南向遺跡出土資料に近似する（島崎2016）が、変容が著しく、模倣土器の可能性はある。共伴する在地土器が古墳時代前期前葉であることから、時期的には矛盾がない。

### 3. 外来系土器からみた地域間交流

前項で当遺跡で出土した外来系土器の可能性のある資料を抽出し、個別に検討を加えた。土器の出土遺構及び時期、搬入／模倣の別、故地と想定される地域などを第22表に、時期比定の際に参照した各地域の編年との対応関係を第23表にまとめており、あらためて外来系土器の概要を整理する。

第101図は外来系土器の出土位置（遺構）について時期ごとの推移を示したものである。外来系土器は後期前葉から認められ、それらは墳丘墓への供献土器として製作、持ち込まれたものが主体となるため、洞ノ原墳丘墓群に集中する。器種は吉備北部地域の模倣土器の脚付鉢あるいは高坏で、特に小型の脚付鉢は備後北部地域においては墳丘墓へ供献される祭式土器としての性格をもつ。洞ノ原1・2号墓出土土器は模倣土器だが、吉備北部地域の器形、文様構成、土器製作技術を混在しながらも踏襲しており、当該地域との交流の深さを示すと考える。当地域では弥生時代中期まで明確な区画や墳丘をもたない墓制が続いており、後期になって妻木晩田遺跡あるいは近傍の尾高浅山遺跡で世帯共同体の代表者に対して墳丘墓が築造される（高田2006）。妻木晩田遺跡では、集落出現期の初期墓域に墳丘墓が築造され、そこに他地域との交流をうかがわせる模倣土器が供献されている点が重要である。墓群中央に位置して始祖的な扱いを受ける洞ノ原2号墓は方形貼石墓だが、隣接する洞ノ原1号墓には四隅突出型墳丘墓が採用され、後続する中小型の墳丘墓にも踏襲されていく契機となっている。中期後半の備後北部地域に起源があり、その後山陰地域に波及、展開していく四隅突出型墳丘墓であるが、その導入は他地域との交流を背景に葬送儀礼のパフォーマンスを重視した（高田2013）という指摘は、模倣土器の器種構成や製作技法から看取される様相と合致し、首肯しうる。さらに、環壕が築かれた洞ノ原西側丘陵においても吉備南部地域から搬入された高坏が出土しており、環壕という施

第22表 妻木晩田遺跡出土外来系土器一覧表

掲載No.	器種	地区	遺構	層位	時期	搬入/模倣	系譜等	備考	文献	
99 1	壺	松尾頭	10区	3号墓西側周溝	①・②層	終末期前半	模倣	吉備北部	橙色胎土	本書
99 2	壺	松尾頭	10区	3号墓西側周溝	②層	終末期前半	模倣	吉備北部	表面赤彩(ベンガラ)	本書
99 3	壺	松尾頭	10区	3号墓北側周溝	①層下面	終末期前半	模倣	吉備北部		本書
99 4	壺	松尾頭	10区	3号墓	墳頂部	終末期前半	模倣	吉備北部	表面赤彩(ベンガラ)	本書
99 5	壺	松尾頭	1区	マウンド状地形A	Tr3②層	終末期前半	搬入	備中南部	内外面赤彩、胎土角閃石混	本書
99 6	壺	松尾頭	1区	マウンド状地形A	Tr3②層	終末期前半	模倣	吉備北部	内外面赤彩	本書
99 7	器台	松尾頭	3区	SI48	埋土中	後期後葉	模倣	吉備北部	円孔3段・5方向	1
99 8	高坏	松尾頭	1区	SI20	埋土中	終末期後半	搬入	吉備南部	土の選択が吉備南部と逆で壺甕用	1
99 9	小型器台	松尾頭	1区	SI20	埋土中	終末期後半	模倣	吉備北部		1
99 10	壺	松尾頭	3区	SI53	埋土中	後期後葉	模倣	不明		1
99 11	壺	松尾頭	4区	SI53	埋土中	後期後葉	模倣	吉備北部	頸部貝殻腹縁多条沈線	5
99 12	高坏	松尾頭	4区	SI53	埋土中	後期後葉	模倣	吉備北部	外面・坏部内面赤彩	5
99 13	壺	松尾頭	3区	SI94	埋土中	終末期後半	搬入	備後	外面・口縁～頸部内面赤彩	1
99 14	脚付鉢	松尾頭	3区	SI94	埋土中	終末期後半	模倣	近畿北部～北陸		1
99 15	壺	松尾頭	7区	SI106	3～5層	後期後葉	模倣	近畿北部～北陸?		6
99 16	壺	松尾頭	7区	SI106	3～5層	後期後葉	模倣	吉備北部(備後)	3mm以下砂粒多量含む	6
99 17	脚付鉢	松尾頭	7区	SI109	1層	終末期後半	搬入	近畿北部～北陸	胎土橙色、白色細砂粒多量	6
99 18	壺	松尾頭	7区	SI109	3～5層	後期前葉	模倣	吉備北部	外面及び口縁内面赤彩	6
99 19	台付壺	松尾頭	3区	SI86	床面直上	終末期後半	模倣	吉備北部?	胎土白色細砂粒多	1
99 20	甕	松尾頭	7区	SS34	14層	終末期	搬入	吉備北部	胴部タタキ、胎土非畿内	6
99 21	壺	松尾頭	5区	SK177	埋土中	終末期後半	模倣	吉備北部	外面・口縁内面赤彩	5
99 22	甕	松尾頭	9区		I-1層	後期後葉	搬入	吉備北部	胴部タタキ、胎土非畿内	6
99 23	高坏	松尾頭	7区		I-1層	後期前葉	搬入	備中南部	内外面赤彩・胎土に角閃石	6
100 1	高坏	洞ノ原	D区	1号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 2	脚付鉢	洞ノ原	D区	1号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 3	高坏	洞ノ原	D区	2号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 4	高坏	洞ノ原	D区	2号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 5	高坏	洞ノ原	D区	2号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 6	高坏	洞ノ原	D区	2号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 7	高坏	洞ノ原	D区	2号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 8	高坏	洞ノ原	D区	4号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 9	器台	洞ノ原		住居1	③層	後期後葉	搬入	吉備南部	工人吉備南部、胎土別	3
100 10	器台	洞ノ原		住居1	③層	後期後葉	搬入	吉備南部	工人吉備南部、胎土別	3
100 11	壺	洞ノ原		DH 8号住居	P1底面	後期後葉	模倣	周防～安芸西部?		2
100 12	脚付鉢	洞ノ原		SK12	①層	後期前葉	模倣	吉備北部		1
100 13	台付壺	洞ノ原		SS05	埋土中	終末期前半	模倣	吉備北部		1
100 14	鉢	洞ノ原		環壕	T3J層	後期前葉	模倣	吉備北部	粘土帯系土器か	3
100 15	高坏	洞ノ原		環壕(西側環壕)	埋土中	後期前葉	搬入	吉備北部	胎土精製・砂粒少	2
100 16	高坏	洞ノ原		環壕	T2J層	後期後葉	搬入	吉備北部	胎土等美作地域か	3
100 17	高坏	洞ノ原		(西側丘陵)	第II層	後期前葉	搬入	備中南部	内外面赤彩、胎土角閃石混	3
100 18	高坏	妻木新山	3区	SK368	埋土中	後期前葉	模倣	吉備北部		1
100 19	高坏	妻木新山	2区	SK132	埋土中	後期前葉	搬入	備中南部	内外面赤彩	1
100 20	鉢	妻木新山	2区	SK132	埋土中	後期前葉	搬入	備後		1
100 21	高坏	妻木新山	2区	SK170・SK172	埋土中	後期前葉	搬入	吉備北部	内外面赤彩	1
100 22	高坏	妻木新山	3区	SS10	側溝底面	後期中葉	模倣	吉備北部		1
100 23	直口壺	仙谷		3号墓第6埋葬施設		後期中葉	模倣	備中南部	胎土が異なる	1
100 24	壺	仙谷		4号墓西側周溝		終末期前半	模倣	周防?		1
100 25	壺	妻木山	1区	SI33	埋土中	後期後葉	模倣	吉備北部	頸部貝殻腹縁多条沈線	1
100 26	高坏	妻木山	2区	SI76	床面直上	後期後葉	搬入	吉備北部	胎土白色細砂粒多	1
100 27	鉢	妻木山	2区	SI117	埋土中	後期後葉	搬入	備後		1
100 28	鉢	妻木山	3区	SI122	床面直上	後期中葉	搬入	備後(吉備北部)	内外面赤彩	1
100 29	鉢	妻木山	2区	SI73	埋土中	終末期後半	模倣	近畿北部～北陸?	胎土白色砂粒多	1
100 30	器台	妻木山	6区	竪穴状遺構	埋土中	後期中葉	搬入	吉備北部		4
100 31	甕	妻木山	2区	SK86	埋土中	終末期後半	搬入	吉備北部	美作地域か	1
100 32	小型高杯	妻木山	2区	SK86	埋土中	終末期後半	搬入	吉備北部		1
100 33	手焙形土器	妻木山	2区	SI97	床面直上	古墳前期前葉	搬入	吉備南部		1

\*文献は1:大山スミス村発掘調査団ほか2000、2:淀江町教育委員会2000、3:鳥取教育委員会2003、4:同2006a、5:同2008、6:同2011a

第23表 編年対照表

本書	松本他 2000	濱田 2003	濱田 2009	松井 1997	渡邊 2009	高橋 1980	團 2000	河合 2015	河合 2018	石田 2019	尾崎 2017	伊藤 1992	
弥生後期前葉 (V-1 (古))	4期	V-1(古)	1期	西伯耆V期	I期	Ⅶ a		後期Ⅰ-1		後Ⅰ古	後期前葉古段階	V-1	
弥生後期前葉 (V-1 (新))	5期	V-1(新)	2期			Ⅶ b		後期Ⅰ-2		後Ⅰ新	後期前葉新段階		
弥生後期中葉 (V-2 (古))	6期	V-2(古)	3期			Ⅶ c		後期Ⅰ-3		後Ⅱ古			
弥生後期中葉 (V-2 (新))	7(・8)期	V-2(新)	4期	西伯耆Ⅵ期	II期	Ⅶ d		後期Ⅱ-1		後Ⅱ新	後期中葉古段階	V-2	
弥生後期後葉 (V-3 (古))	(8・9)期	V-3(古)	5期			西伯耆Ⅶ期		Ⅶ a		後期Ⅱ-2	後Ⅲ古		
弥生後期後葉 (V-3 (新))		V-3(新)	6期	西伯耆Ⅷ期	Ⅶ b	後3期	後期Ⅲ-1	後Ⅲ新	後期中葉新段階				
				Ⅶ c	後期Ⅲ-2								
					Ⅲ a期	Ⅷ d	後4期	後期Ⅲ-3		後Ⅳ古		V-3	
弥生終末期前半 (Ⅵ-1)	10期		7期	西伯耆Ⅸ期	Ⅲ b期	Ⅸ a		終末期1					後Ⅳ新
				西伯耆Ⅹ期		Ⅸ b		終末期2					
					Ⅸ c	終末期3							
弥生終末期後半 (Ⅵ-2 (古))	11期		8期	西伯耆ⅩⅠ期	Ⅳ a期	X a	庄内1期	古前Ⅰ-1	1期				
					X b	古前Ⅰ-2		2期					
弥生終末期後半 (Ⅵ-2 (新))	12期		9期	西伯耆ⅩⅡ期	Ⅳ b期	X c	庄内2期	古前Ⅰ-3	3期				
古墳前期前葉	13期		10期	西伯耆ⅩⅢ期	V期	X d	庄内3期		4期				
					Ⅵ期	X e			5期				

設が存続期間を同じくする墳丘墓群と並び集団内部の紐帯を強めるだけでなく他地域との交流の場としても大規模集落の形成初期にあって重要な空間であったことを示唆する。一方、居住域からの出土状況を見ると、妻木新山地区へ集中している。妻木新山地区で外来系土器と把握できたものは、備後系の鉢1点を除き吉備系高坏であった。高坏のうち1点は確実に備中南部からの搬入土器で、他は胎土から判別はできないが吉備北部からの搬入土器の可能性が高い。洞ノ原地区の搬入・模倣土器のあり方も含め、集落形成期から中国山地を介した人の動きが活発であったことがうかがえる。

後期中葉になると妻木山地区に外来系土器が集中する傾向が認められる。多くが吉備北部地域と総括でき、備後地域の鉢が引き続き出土することが特徴である。墳墓供献土器としては、仙谷3号墓で吉備地域の直口壺が出土している。同器種は後期中葉以降出現し、間もなく墳墓供献土器として持ち込まれており、山陰地域でも出雲市青木遺跡1号墓・山持遺跡で類例が出土している。

後期後葉は、集落構造の変化に合わせて外来系土器の出土分布にも変化が見られる。最大の違いは、松尾頭地区に外来系土器が集中する点である。この時期の中心的な居住域は松尾頭地区と妻木山地区だが、両地区の相違点は外来系物資の保有状況にある。特に松尾頭3～6区は板状・棒状の非製品や鉄片といった鉄器製作に関連する遺物が多数出土し、鍛冶工房と目される竪穴住居跡(3区SI39・53・98)も検出され、当該期の集落内鉄器生産の中核的なエリアと想定される(高尾2015)。さらに、同地区の鍛冶工房が含まれる居住単位を中心にガラス玉が集中する状況も併せて認められる。こうした希少物資の集約と連動して外来系土器が分布する状況は、人の動きを示す現象と捉えられるだろう。同じ松尾頭地区でも後に墓域となる1区や、後期後葉以降に居住域として拡充される旧小真石清水地区では外来形土器が出土しない。外来形土器が生産や交流の中核を担う居住単位に集合する傾向が明らかだ。同地区で出土した外来系土器の内実を見ると、吉備北部地域のうち東側の美作北部からの搬入土器や近畿北部～北陸地域の模倣土器が多く、外来形土器の構成にも変化が生じている。

終末期前半は、墳丘墓に外来系土器が供献されている。仙谷4号墓出土壺は周防西部等瀬戸内系壺